報道用資料

元気を開う時代へ
健康日本21
推進フォーラム

健康日本21推進フォーラム
2011年11月22日

インフルエンザに関する調査
～よりよい健康危機管理の推進にむけて～

健康日本21推進フォーラム（事務局：東京都中央区、理事長：高久史麿・自治医科大学学長）は、過去1年間にインフルエンザ（新型、季節性）にかかったお子さんを持つ母親1,000人（来年受験予定のお子さんがいる母親500人、受験予定のお子さんがいない母親500人）を対象にインターネット調査を実施しました。

本調査は、2009年の新型インフルエンザの後、昨シーズン（2010年-2011年）のインフルエンザに対し、どのように対処し、意識していたかを探ることを目的に行ったものです。

本調査の結果、子どもを持つ母親が、新型、季節性を問わず、インフルエンザの予防や治療に対して非常に高い意識を持っていることが明らかになり、日本のインフルエンザによる死亡率や重症化が、諸外国に比べて低いことに寄与している様子が伺えました。その一方で、若年層の母親が全般的にインフルエンザの治療に関する知識が低いことや、全体として季節性インフルエンザを軽視しているという事実も浮き彫りとなりました。

調査結果の主なトピックスは以下のとおりです。

■ インフルエンザへの関心

○9割以上（94.4%）がインフルエンザは「今度の冬も流行する」と考え、4人に3人（72.2%）が「昨シーズンも今度の冬も関心は高い」。
○3人に1人（31.1%）が、季節性インフルエンザを軽視。さらに季節性インフルエンザの危険性に関する認識に甘さもみられる。

■ インフルエンザの自己防衛策として

○半分以上（56.3%）が予防接種を受け、ほぼ全員（94.2%）が何らかの予防策を実施。
○今度の冬はさらに予防を強める姿勢。中でも、中学受験を控える母親は積極的に行動予定。

■ インフルエンザに対する危機意識

○インフルエンザは「重症化、死に至る可能性がある病気」であると、8割強（83.1%）が認識。
○3人に2人（66.4%）がインフルエンザの罹患への「不安を感じている」など、インフルエンザに対する危機意識は高い。
○若年層の母親（34歳以下）ほど、全般的にインフルエンザの治療認知率が低い。

■ インフルエンザへの対処姿勢

○インフルエンザと思われる症状が出て7割強（73.3%）が、12時間以内に医療機関を受診。前年度調査の5割と比べ、およそ2割の人が早期受診に行動変容。
○受診までに半日を越えた場合、発症から受診までの間に約8割（80.5%）が不安や恐怖を体験。

■ インフルエンザの治療薬について

○5日間の服用が必要なタミフルやリレンザを、6人に1人（16.3%）が途中で服用を止めている。
○治療薬に求めるのは「副作用の心配が少ない」「効き目・効果が早い」など。

■ 医療（医師）に求めるもの

○「子どもの負担がかからない治療」「重症化の可能性を考えた治療」など。

【本調査に関するお問い合わせ先】
健康日本21推進フォーラム事務局　戸上
電話：03-3544-5641　FAX：03-3544-5642
E-mail：info@kenko-nippon21forum.gr.jp

目　次

Q:インフルエンザへの関心　　1～2 P

■ 9割以上(94.4%)が"今度の冬も流行する"。
■ いつでもインフルエンザは関心事。4人に3人(72.2%)が「昨シーズンも今度の冬も関心は高い」。
■ 3人に1人(31.1%)が、季節性インフルエンザを軽視。
■ 季節性インフルエンザの危険性の認識に甘さ。

Q:インフルエンザの自己防衛策　　3～4 P

■ 半分以上(56.3%)は予防接種。
■ 予防接種を受けなかった理由は「タイミング」「お金」「効果がないと思う」。
■ 予防接種以外でも、ほぼ全員(94.2%)が何らかの予防策を実施。
■ 今度の冬はさらに予防を強める姿勢。中でも、中学受験を控える母親は積極的に行動予定。

Q:インフルエンザに対する危機意識　　5～6 P

■ インフルエンザは重症化、死に至る可能性がある病気であると8割(83.1%)が認識。
■ 若年層(34歳以下)の母親ほど、全般的にインフルエンザの治療に関する知識が低い。
■ 3人に2人(66.4%)が"不安を感じている"。
■ 不安を感じるのは「重症化により、死に至る可能性があるから」(63.4%)。

Q: インフルエンザへの対処姿勢　　7～8 P

■ インフルエンザと思われる症状が出て7割強(73.3%)が12時間以内に医療機関を受診。
前年度よりも約20%の人が早期受診に行動変容。
■ 受診までに半日を越えた場合、発症から受診までの間に約8割(80.5%)が何らかの不安や
恐怖を体験。

Q:インフルエンザの治療薬について　　9～10P

■「タミフル」(43.5%)、「リレンザ」(39.9%)が拮抗。
■ タミフルやリレンザなど、本来5日間飲みきるべき薬を、6人に1人(16.3%)が途中で服用を止めている。
■ 吸入薬については、約3人に2人がきちんと吸えているか不安感を持ちながら治療。
■ インフルエンザ治療薬に求めるのは、「副作用の心配が少ない」「効き目が早い」「効果が早い」など。

Q:回復までの日数と、医療(医師)に求めるもの　　11 P

■ 学校や幼稚園に復帰するのは、熱が下がった「3日後」(32.4%)、「2日後」(30.7%)。
■ 医師に求めるのは、「子どもの負担がかからない治療」「重症化の可能性を考えた治療」など。

※本調査で記載の新型インフルエンザは、「インフルエンザ(H1N1)2009」のことを意味しています。

《所感》

インフルエンザにかかったときの対処―若年層の母親に不安
新渡戸文化学園短期大学学長/健康日本21推進フォーラム理事　中原英臣　　12 P

調査概要	【調査方法】	インターネット調査
	【調査対象】	以下の条件を満たす女性　計1,000人 過去1年間に季節性インフルエンザ(A型、B型、C型)または 新型インフルエンザで病院に行ったことのある16歳未満の子どもを持つ 母親から無作為抽出 来年受験予定の子ども有無で
	【調査期間】	2011年8月27日～30日

インフルエンザへの関心

■ 9割以上(94.4%)が“今度の冬も流行する”。

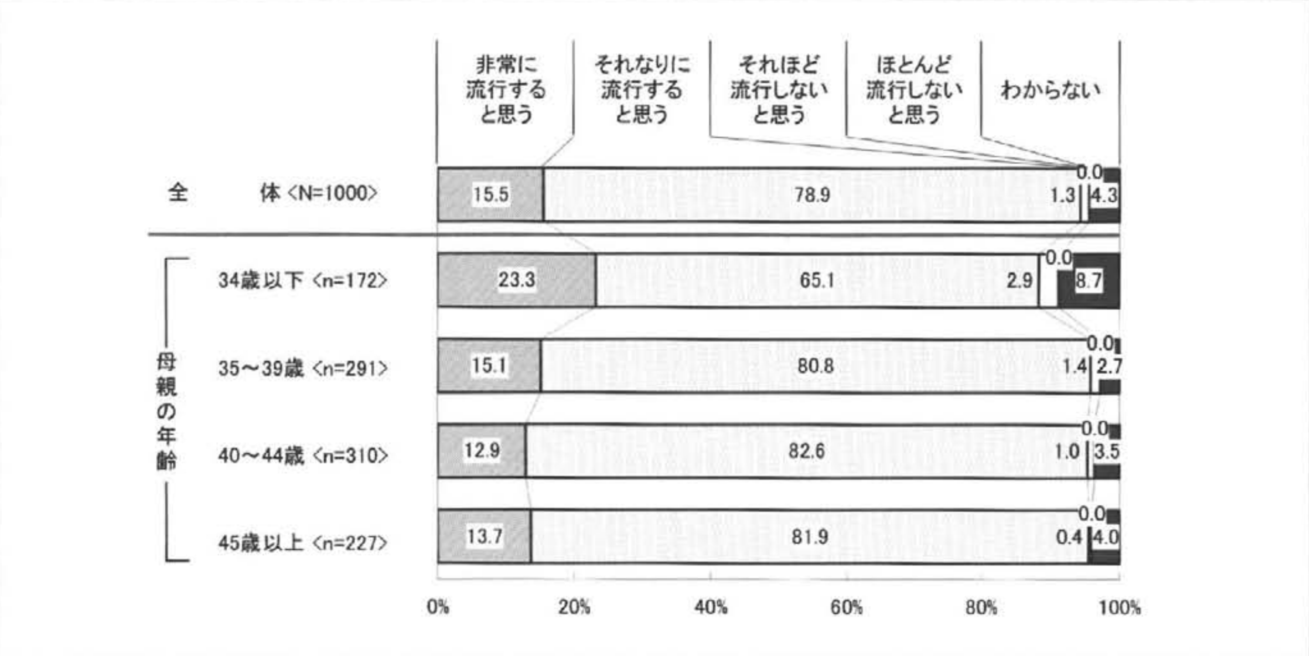
■ いつでもインフルエンザは関心事。4人に3人(72.2%)が「昨シーズンも今度の冬も関心は高い」。

今度の冬のインフルエンザが流行すると思うかを聞いたところ、「非常に流行すると思う」(15.5%)、「それなりに流行すると思う」(78.9%)で、“流行すると思う”は9割以上(94.4%)に上りました [グラフ1]。

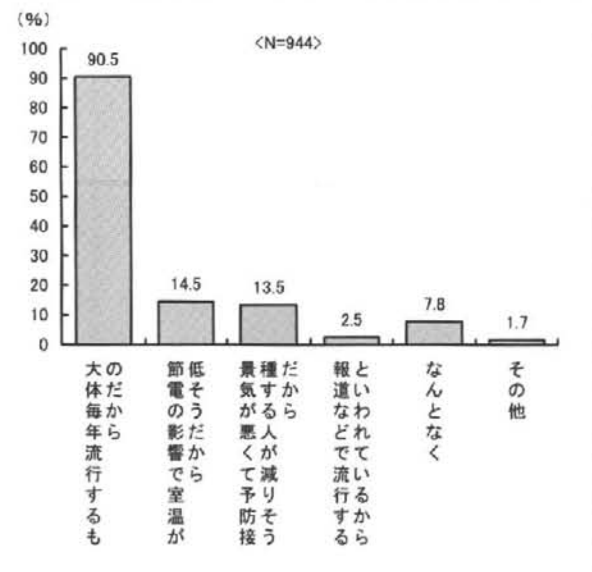
流行すると思う理由は、「大体毎年流行するものだから」(90.5%)が圧倒的に多いものの、「節電の影響で室温が低そうだから」(14.5%)、「景気が悪くて予防接種する人が減りそうだから」(13.5%)など、世相を反映した回答もみられました [グラフ2]。

インフルエンザへの関心について、4人に3人(72.2%)が「昨シーズンも今度の冬も、関心は高い」で、年に関係なくインフルエンザは関心事であることが分かりました [グラフ3]。

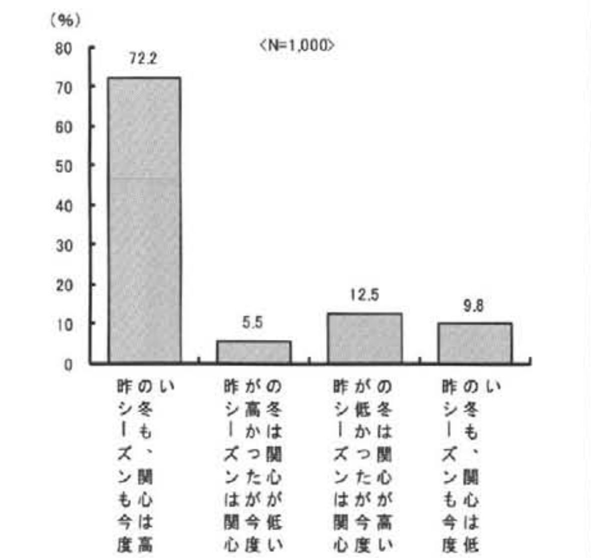
グラフ1:今度の冬の流行予想 <n=1,000>



グラフ2:流行すると思う理由 <n=944> (複数回答)



グラフ3:インフルエンザへの関心の変化 <n=1,000>



インフルエンザへの関心

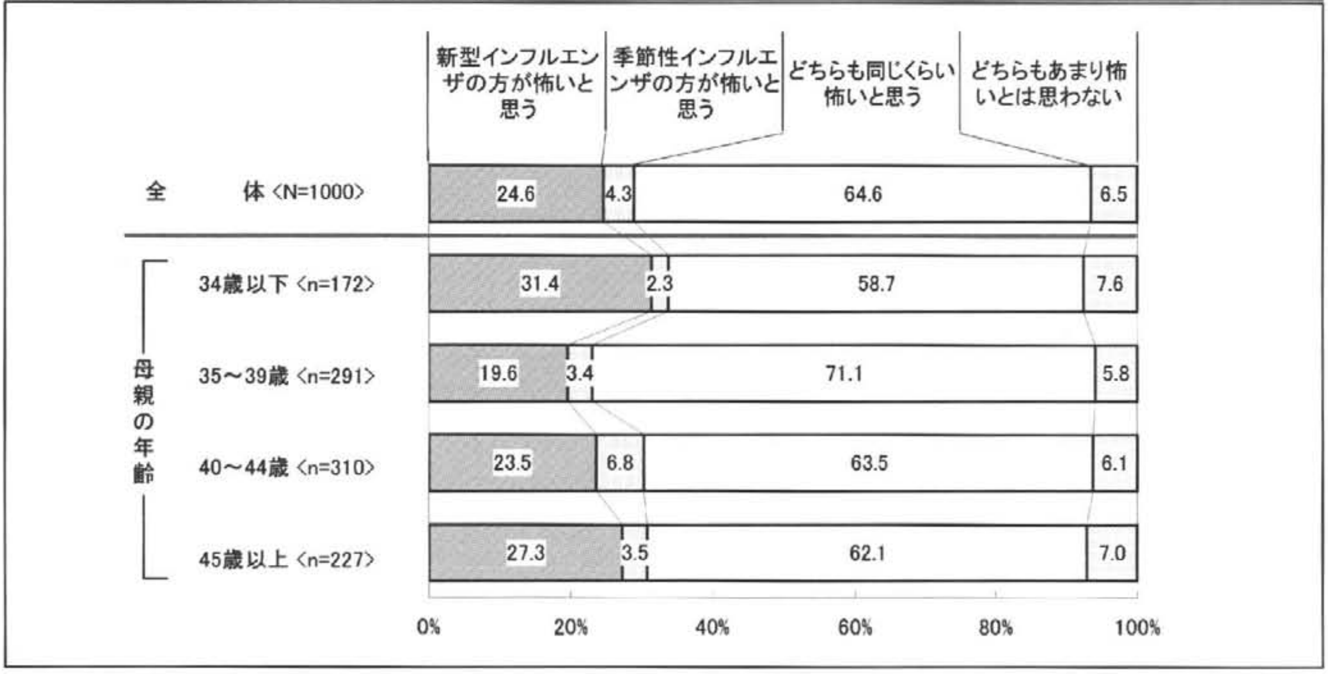
■ 3人に1人(31.1%)が、季節性インフルエンザを軽視。

■ 季節性インフルエンザの危険性の認識に甘さ。

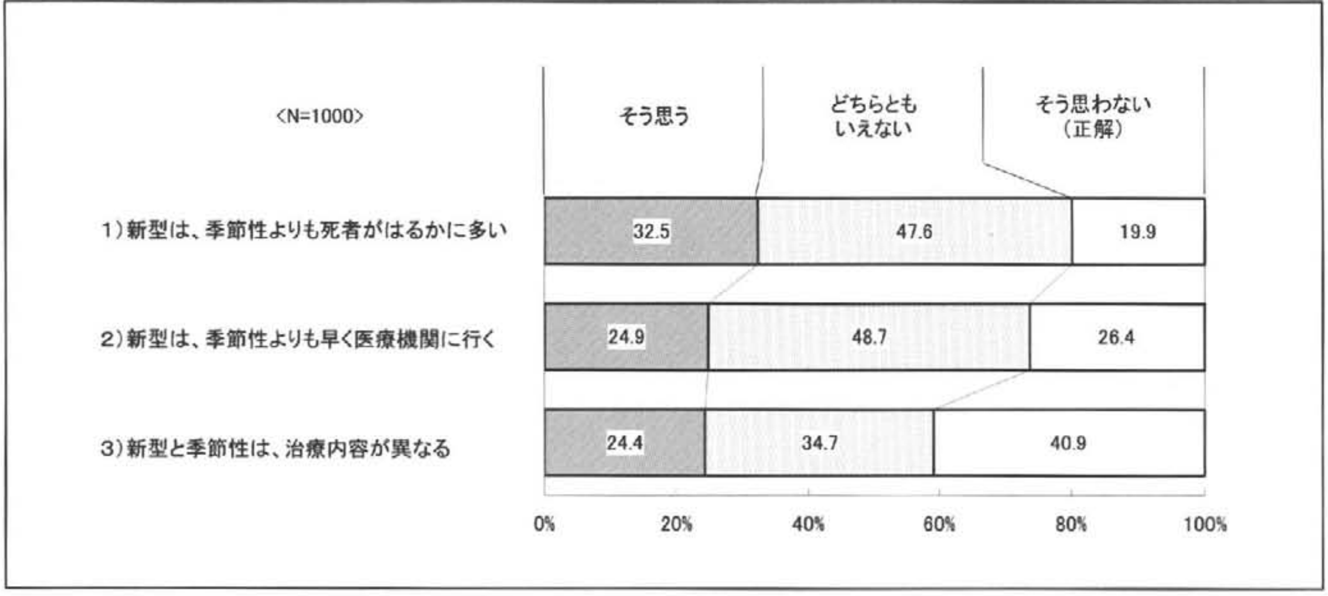
2009年に流行した「新型インフルエンザ」と、通常の「季節性インフルエンザ」についての意識を比較すると、「新型インフルエンザの方が怖いと思う」(24.6%)、「どちらもあまり怖いとは思わない」(6.5%)で、約3人に1人(31.1%)が"季節性インフルエンザを軽視"していることが分かりました [グラフ4]。

さらに、「新型インフルエンザ」と「季節性インフルエンザ」に関する知識を聞いたところ、「新型インフルエンザは、季節性インフルエンザよりも死者がはるかに多い」(32.5%)、「新型インフルエンザは、季節性インフルエンザよりも早く医療機関に行く」(24.9%)、「新型インフルエンザと季節性インフルエンザは、治療内容が異なる」(24.4%)と間違った認識をしている人もみられ、季節性インフルエンザの危険性に関する認識に甘さが見られました [グラフ5]。

グラフ4：新型と季節性で怖いと思う方 <n=1,000>



グラフ5：予防の内容の変化有無 <n=1,000>



インフルエンザの自己防衛策

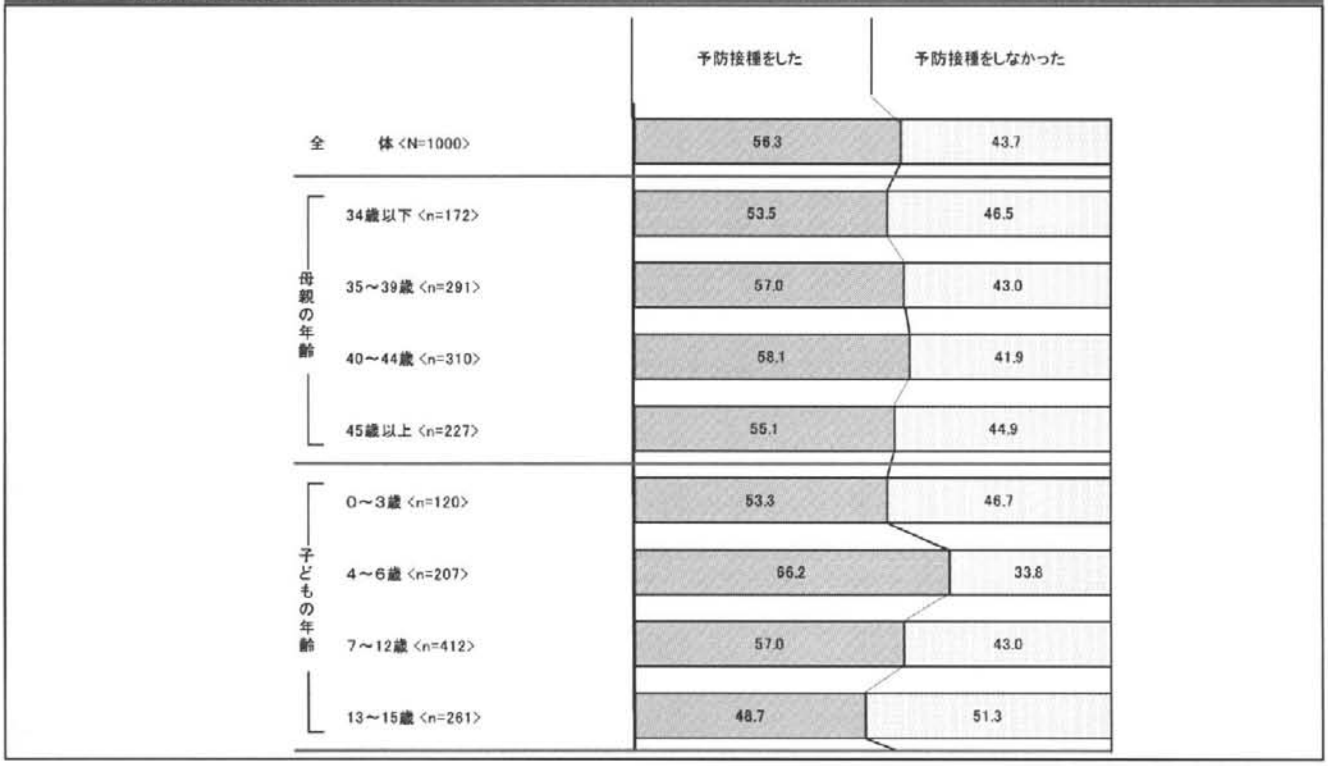
■ 半分以上（56.3％）は予防接種。

■ 予防接種を受けなかった理由は「タイミング」「お金」「効果がないと思う」。

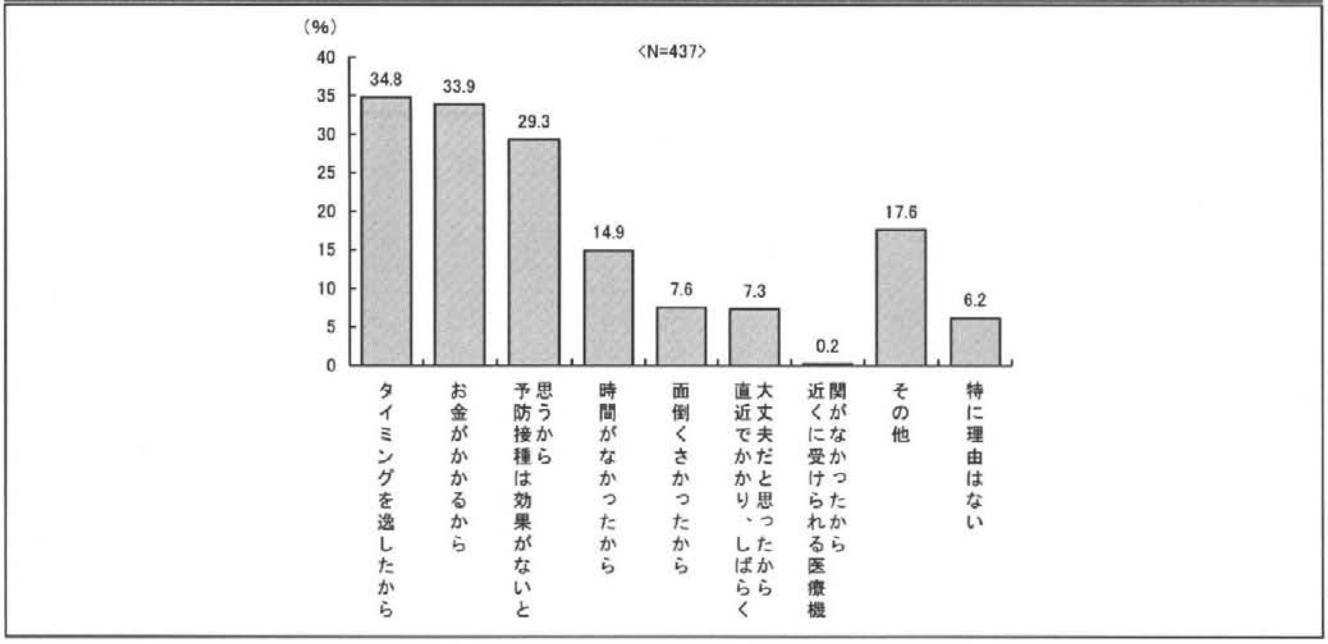
子どもが予防接種を「した」人は約半数（56.3%）。子どもの年齢別でみると、子どもが4～6歳で「予防接種をした」（66.2%）割合が最も高くなっています［グラフ6］。
前年度調査（2010年8月実施、当フォーラム）の新型インフルエンザが流行した2009-2010年シーズンで、約半数（51.6%）が予防接種を「受けた」と回答していましたので、微増ながら増加しています。

予防接種を受けなった理由は、順に「タイミングを逃したから」（34.8%）、「お金がかかるから」（33.9%）でしたが、続いて「予防接種は効果がないと思うから」（29.3%）が高く、予防接種に対してやや懐疑的な様子がうかがえます［グラフ7］。

グラフ6：予防接種の状況 <n=1,000>



グラフ7：予防接種を受けなかった理由 <n=437>（複数回答）



インフルエンザの自己防衛策

■ 予防接種以外でも、ほぼ全員(94.2%)が何らかの予防策を実施。

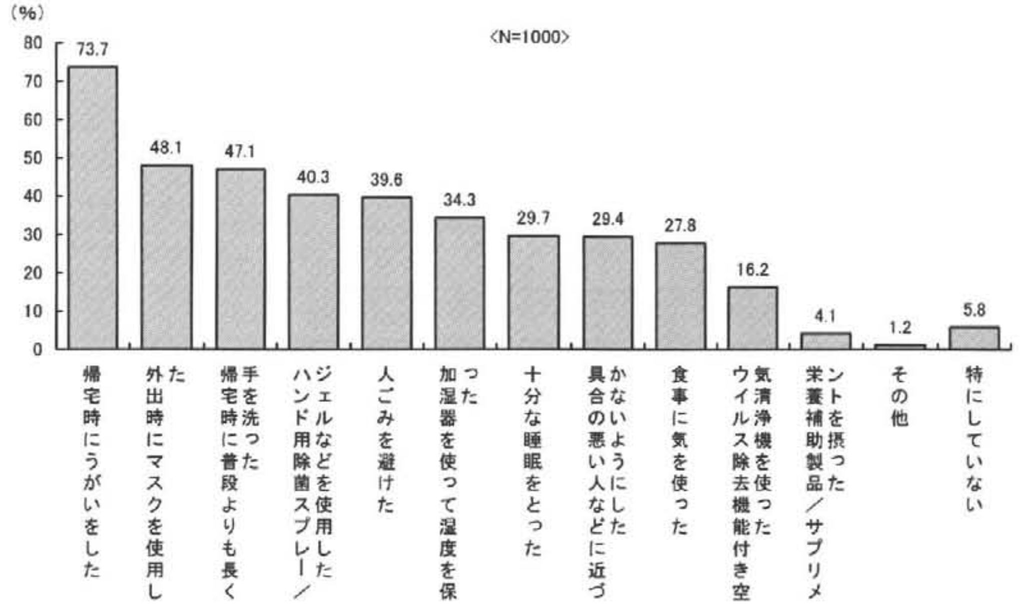
■ 今度の冬はさらに予防を強める姿勢。中でも、中学受験を控える母親は積極的に行動予定。

予防接種以外の予防策については、「帰宅時にうがい」は4人に3人(73.7%)が実施し、続いて「外出時にマスクを使用した」(48.1%)、「帰宅時に普段よりも長く手を洗った」(47.1%)などが続きます。「特にしていない」(5.8%)を除く、9割以上(94.2%)が何らかの予防策を講じていました [グラフ8]。

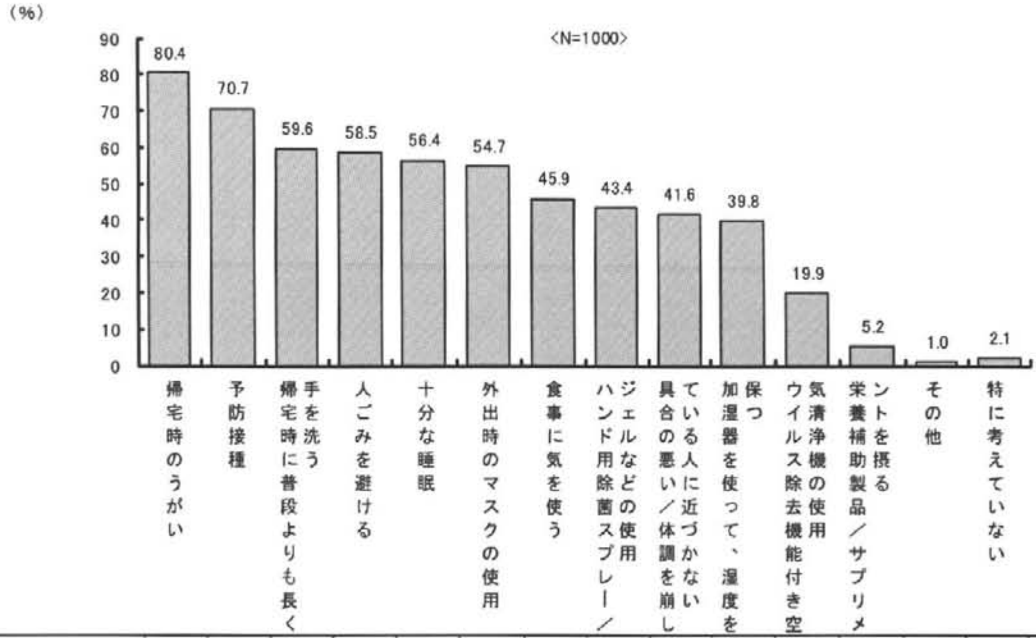
今度の冬のインフルエンザ対策については、昨シーズン同様「帰宅時にうがい」が最も多く、8割(80.4%)でした。次いで、「予防接種」(70.7%)、「手を洗う」(59.6%)などが続きますが、すべての項目で昨シーズンの実施率を上回り、インフルエンザに対する防衛意識の高まりを示しています。

中でも、来年中学校受験を予定している子どもを持つ母親はインフルエンザ対策に敏感で、予防への積極的な取り組み姿勢がみられます [グラフ9]。

グラフ8：昨シーズンの予防接種以外の予防策 <n=1,000> (複数回答)



グラフ9：今度の冬のインフルエンザに対する予防策 <n=1,000> (複数回答)



		帰宅時のうがい	予防接種	帰宅時に普段よりも長く手を洗う	人ごみを避ける	十分な睡眠	外出時のマスクの使用	食事に気を使う	ハンド用除菌スプレー／ジェルなどの使用	具合の悪い／体調を崩している人に近づかない	加湿器を使って、湿度を保つ	ウイルス除去機能付き空気清浄機の使用	栄養補助製品／サプリメントを摂る	その他	特に考えていない
来年の子ども受験予定	いる<n=507>	76.9	72.0	57.6	55.8	52.9	60.6	49.1	41.6	41.6	35.1	20.3	7.3	0.8	2.6
	＜小学校受験 n=79＞	65.8	65.8	60.8	50.6	46.8	46.8	50.6	41.8	43.0	29.1	22.8	6.3	-	12.7
	＜中学校受験 n=119＞	84.0	79.0	66.4	62.2	58.8	70.6	62.2	50.4	47.9	40.3	32.8	9.2	-	-
	＜高校・大学受験 n=326＞	76.7	71.8	54.3	55.5	52.5	60.1	45.1	39.6	39.9	34.0	15.6	7.1	1.2	0.9
	いない<n=493>	84.0	69.4	61.7	61.3	60.0	48.7	42.6	45.2	41.6	44.6	19.5	3.0	1.2	1.6

インフルエンザに対する危機意識

■ インフルエンザは重症化、死に至る可能性がある病気であると8割(83.1%)が認識。
■ 若年層(34歳以下)の母親ほど、全般的にインフルエンザの治療に関する知識が低い。

以下のグラフ1)「重症化および死に至る可能性がある」(83.1%)から、5)「進行が早く、最初に適切な治療を行うことが重要」(60.0%)までは、6割以上の認知率となっています。
一方で、「吸入薬は肺などの体内には効果が及ばない」(18.1%)、「治療薬はウイルスをやっつけていく薬ではなく、体内での増殖を止める薬である」(27.7%)など、治療薬の効果・作用に関する内容で認知率が3割以下と低い状況でした [グラフ10]。

また、母親の年齢別で「確かに知っている」の割合をみると、全般的に若年層(34歳以下)の母親ほど認知率が低く、特に「48時間以内に治療を開始しないと重症化しやすい」「進行が早く、最初に適切な治療を行うことが重要」で、45歳以上の認知率に比べ20ポイント近く下回る結果となりました [表1]。

グラフ10:インフルエンザの治療認知 <n=1,000>

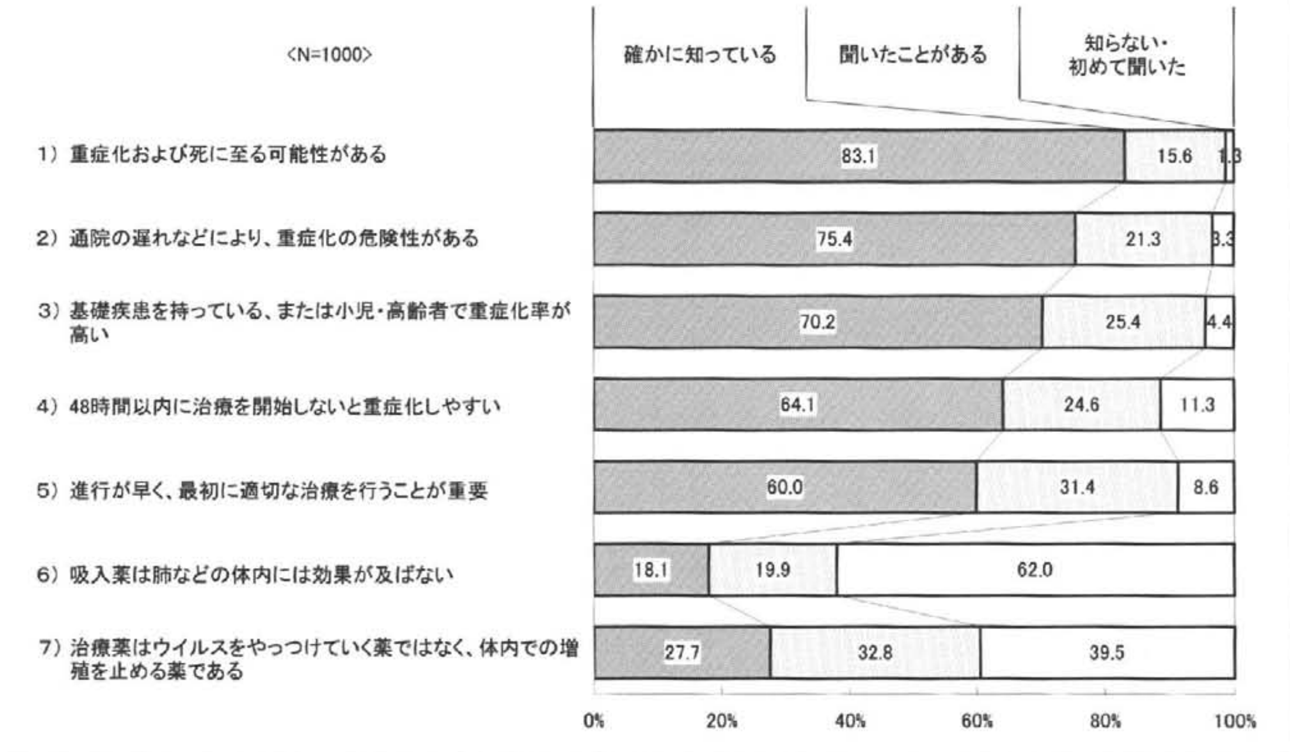


表1:母親の年齢別による「確かに知っている」の割合

(%)

		サンプル数	1) 重症化および死に至る可能性がある	2) 通院の遅れなどにより、重症化の危険性がある	3) 基礎疾患を持っている、または小児・高齢者で重症化率が高い	4) 48時間以内に治療を開始しないと重症化しやすい	5) 進行が早く、最初に適切な治療を行うことが重要	6) 吸入薬は肺などの体内には効果が及ばない	7) 治療薬はウイルスをやっつけていく薬ではなく、体内での増殖を止める薬である
全体		1000	83.1	75.4	70.2	64.1	60.0	18.1	27.7
母親の年齢	34歳以下	172	75.0	68.6	65.7	52.9	47.7	19.8	23.8
	35～39歳	291	85.2	75.3	67.7	63.6	61.2	17.2	27.5
	40～44歳	310	84.8	76.5	72.9	66.5	61.3	13.2	25.8
	45歳以上	227	84.1	79.3	73.1	70.0	66.1	24.7	33.5

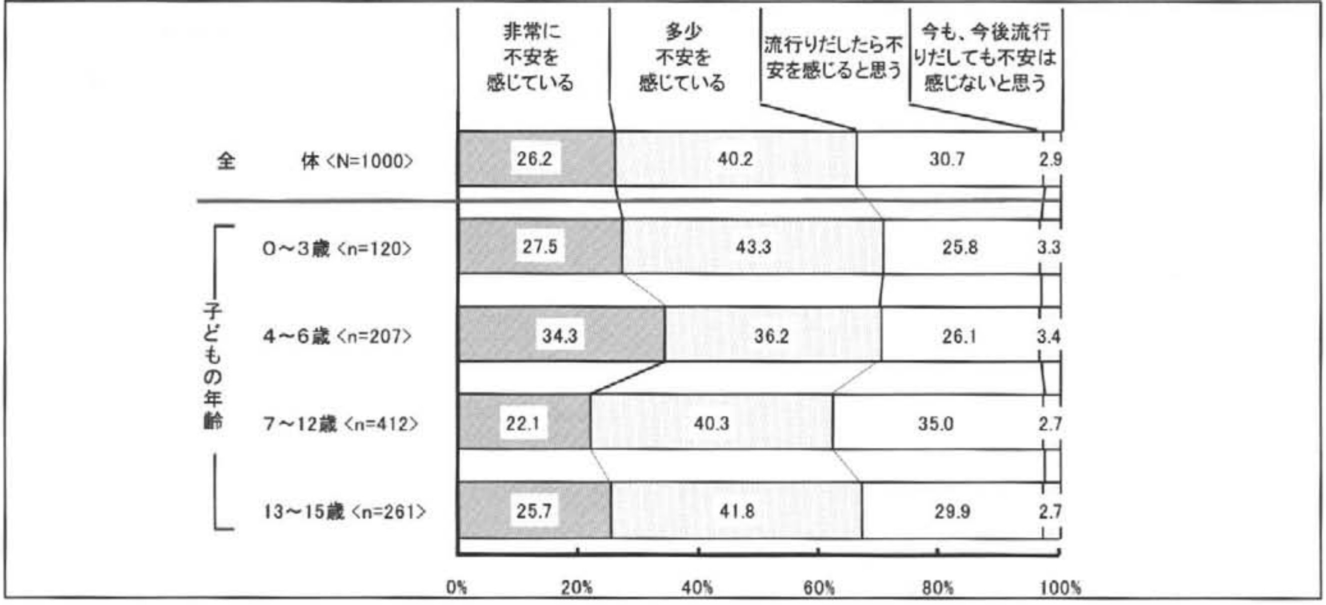
インフルエンザに対する危機意識

■ 3人に2人(66.4%)が"不安を感じている"。
■ 不安を感じるのは「重症化により、死に至る可能性があるから」(63.4%)。

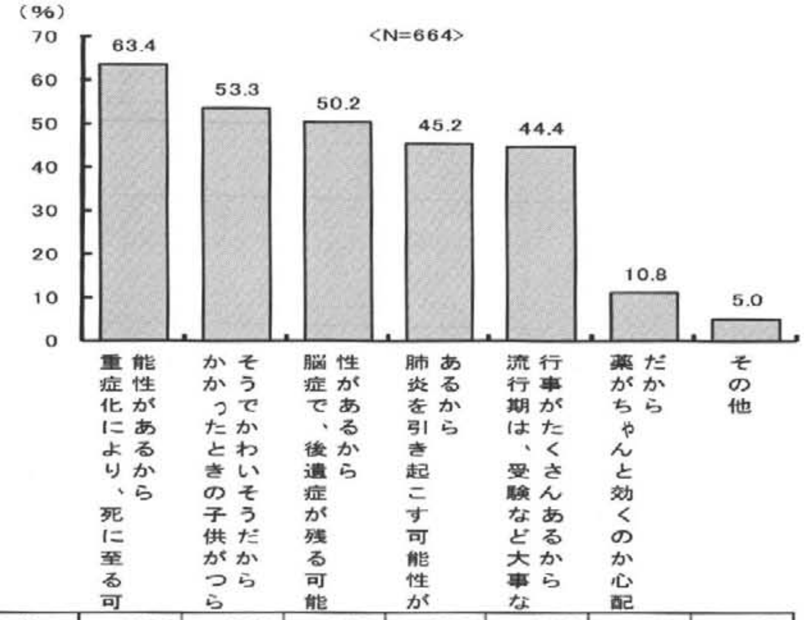
今度の冬のインフルエンザについては、「非常に不安を感じている」(26.2%)、「多少不安を感じている」(40.2%)で、3人に2人(66.4%)が既に"不安を感じている"ことが分かりました [グラフ11]。

特に、子どもの年齢別にみると、子どもが4~6歳で「非常に不安を感じている」(34.3%)の割合が高めで、子どもが7~12歳(22.1%)で逆に最も低くなっています。

グラフ11:今度の冬のインフルエンザへの不安 <n=1,000>



グラフ12:不安の理由 <n=664> (複数回答)



		重症化により、死に至る可能性があるから	かかったときの子供がつらそうでかわいそうだから	脳症で、後遺症が残る可能性があるから	肺炎を引き起こす可能性があるから	流行期は、受験など大事な行事がたくさんあるから	薬がちゃんと効くのか心配だから	その他
母親の年齢	34歳以下 <n=114>	70.2	65.8	60.5	60.5	20.2	14.9	6.1
	35~39歳 <n=200>	68.0	62.0	52.0	53.0	34.5	11.5	3.5
	40~44歳 <n=203>	61.1	49.8	47.3	34.5	54.2	8.4	5.9
	45歳以上 <n=147>	55.1	36.7	43.5	37.4	63.3	10.2	4.8
子どもの年齢	0~3歳 <n=85>	69.4	71.8	62.4	57.6	15.3	11.8	5.9
	4~6歳 <n=146>	76.0	62.3	56.8	56.8	26.7	15.1	2.7
	7~12歳 <n=257>	65.0	54.5	50.2	44.7	46.3	9.7	5.8
	13~15歳 <n=176>	47.7	35.2	38.6	30.1	70.5	8.5	5.1
受験予定の子ども	いる <n=353>	60.3	41.9	45.9	68.6	11.3	42.8	3.7
	いない <n=311>	66.9	48.9	55.0	17.0	10.3	65.3	6.4

インフルエンザへの対処姿勢

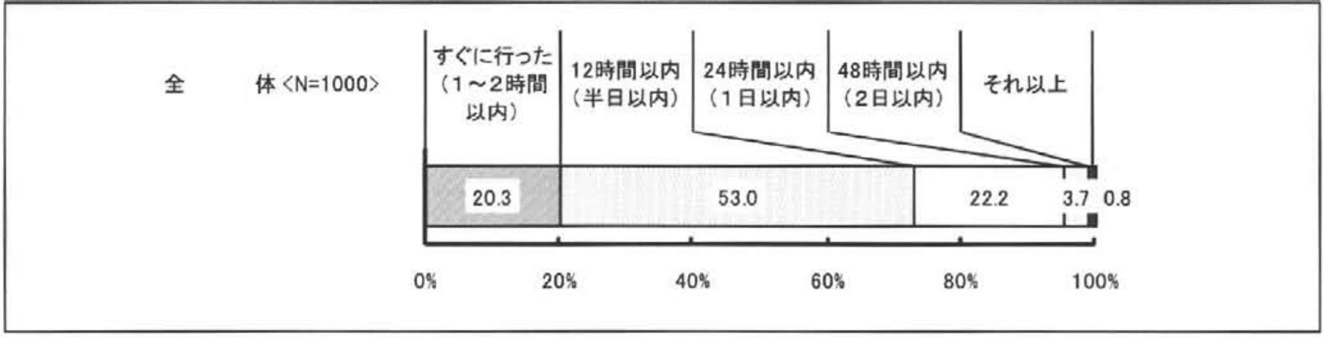
■ インフルエンザと思われる症状が出て7割強（73.3％）が12時間以内に医療機関を受診。前年度よりも約20％の人が早期受診に行動変容。

子どもに、インフルエンザと思われる症状が出てから医療機関に行くまでの時間を聞いたところ、「すぐに行った（1～2時間以内）」（20.3%）、「12時間以内（半日以内）」（53.0%）で、7割強（73.3%）が“12時間以内”に受診していました［グラフ13］。

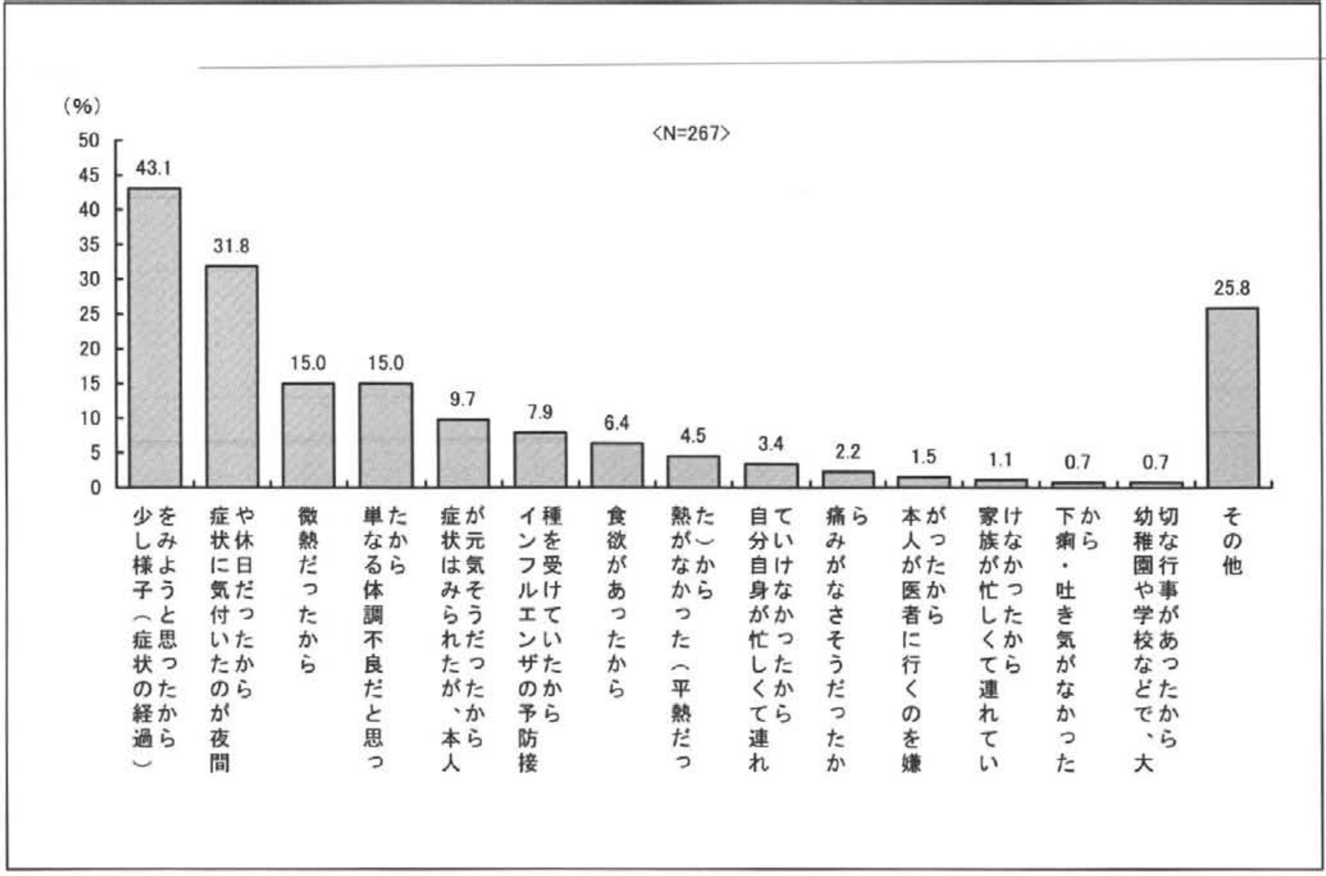
前年度調査と比較すると「12時間以内（半日以内）」が約20ポイント増加しており、早期治療の意識がさらに高まっていることがうかがえます。

また、12時間以内に受診しなかった人が、医療機関に行くまでに時間がかかった理由は、「少し様子をみようと思ったから」（43.1%）、「症状に気付いたのが夜間（または休日）だったから」（31.8%）などが高めでした［グラフ14］。

グラフ13：医療機関を受診するまでの時間 <n=1,000>



グラフ14：受診までに半日以上かかった理由 <n=267>（複数回答）

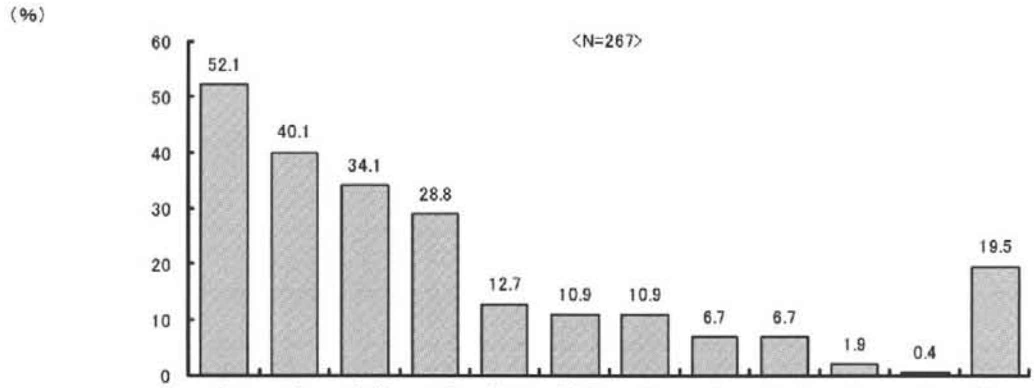


インフルエンザへの対処姿勢

■ 受診までに半日を越えた場合、発症から受診までの間に約8割(80.5%)が何らかの不安や恐怖を体験。

12時間以内に受診しなかった人は、診察までの間に「家族への感染」(52.1%)、「症状の悪化」(40.1%)、「高熱による身体への影響」(34.1%)などについて不安や恐怖を感じたようです。
「特に不安や恐怖はなかった」(19.5%)を除く8割(80.5%)が、不安や恐怖を感じています [グラフ15]。

グラフ15:診察までに感じた不安や恐怖 <n=267> (複数回答)



		家族への感染	症状の悪化	高熱による身体への影響	インフルエンザ脳症、肺炎などの重症化	他の人(家族以外)への感染	学校を休むなど勉強の遅れ	自分の仕事への影響	治り(完治)の遅れ	目が離せなくなる(付きっきりになる)	自分の家事への影響	その他	特に不安や恐怖はなかった
母親の年齢	34歳以下 <n=56>	51.8	33.9	46.4	35.7	14.3	7.1	8.9	7.1	5.4	1.8	1.8	21.4
	35～39歳 <n=77>	57.1	44.2	37.7	31.2	9.1	11.7	13.0	5.2	11.7	1.3	-	13.0
	40～44歳 <n=75>	56.0	38.7	30.7	26.7	18.7	10.7	12.0	6.7	4.0	1.3	-	18.7
	45歳以上 <n=59>	40.7	42.4	22.0	22.0	8.5	13.6	8.5	8.5	5.1	3.4	-	27.1
子供の年齢	0～3歳 <n=35>	42.9	40.0	48.6	31.4	8.6	-	8.6	2.9	5.7	-	-	20.0
	4～6歳 <n=61>	50.8	52.5	39.3	36.1	13.1	4.9	14.8	11.5	4.9	1.6	1.6	21.3
	7～12歳 <n=109>	52.3	38.5	33.9	29.4	11.0	13.8	10.1	5.5	9.2	1.8	-	14.7
	13～15歳 <n=62>	58.1	30.6	21.0	19.4	17.7	17.7	9.7	6.5	4.8	3.2	-	25.8

インフルエンザの治療薬について

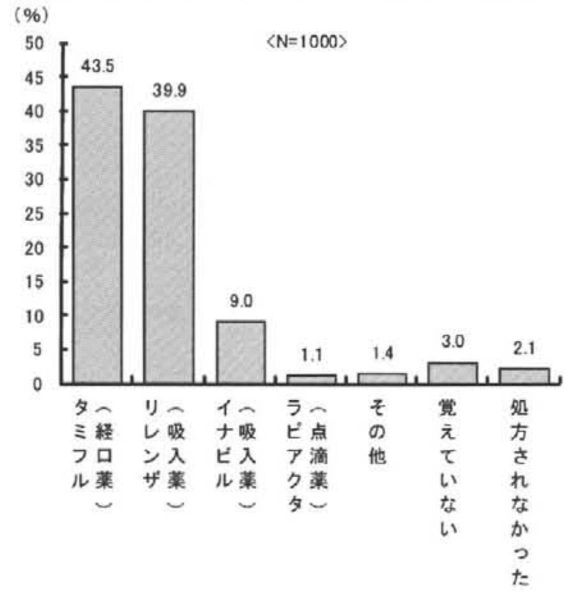
■「タミフル」(43.5%)、「リレンザ」(39.9%)が拮抗。
■ タミフルやリレンザなど、本来5日間飲みきるべき薬を、6人に1人(16.3%)が途中で服用を止めている。

子どもがインフルエンザになって処方された薬は、「タミフル」(43.5%)、「リレンザ」(39.9%)が拮抗しています [グラフ16]。

タミフルやリレンザなどは、5日間飲みきることが必要な薬ですが、すべて飲みきったかを聞いたところ、「飲みきった」が8割以上(83.7%)で、前々年度調査(19.2%)、前年度調査(18.6%)にくらべ徐々に改善されているものの、まだ6人に1人(16.3%)が途中で服用を止めていました。

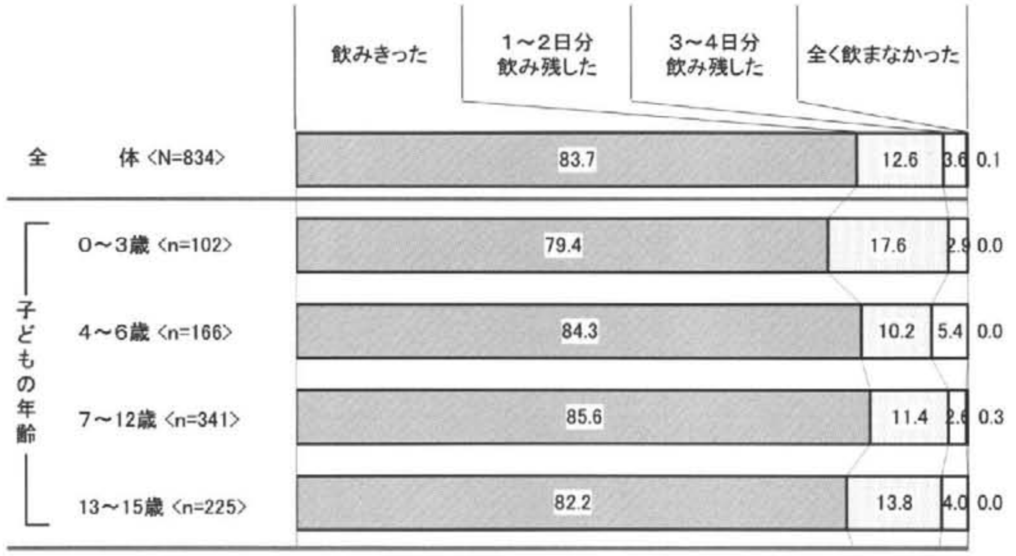
子どもの年齢別にみると、0~3歳では2割(20.5%)が途中で服用を止めています[グラフ17]。

グラフ16:医師から処方された薬 <n=1,000>



子供の年齢								
	0~3歳 <n=120>	74.2	10.8	0.8	0.8	5.0	3.3	5.0
	4~6歳 <n=207>	69.6	10.6	5.8	3.4	0.5	6.3	3.9
	7~12歳 <n=412>	34.0	48.8	12.9	0.7	0.7	1.7	1.2
	13~15歳 <n=261>	23.8	62.5	9.2	-	1.5	2.3	0.8

グラフ17:タミフル・リレンザの服用状況 <n=834>



インフルエンザの治療薬について

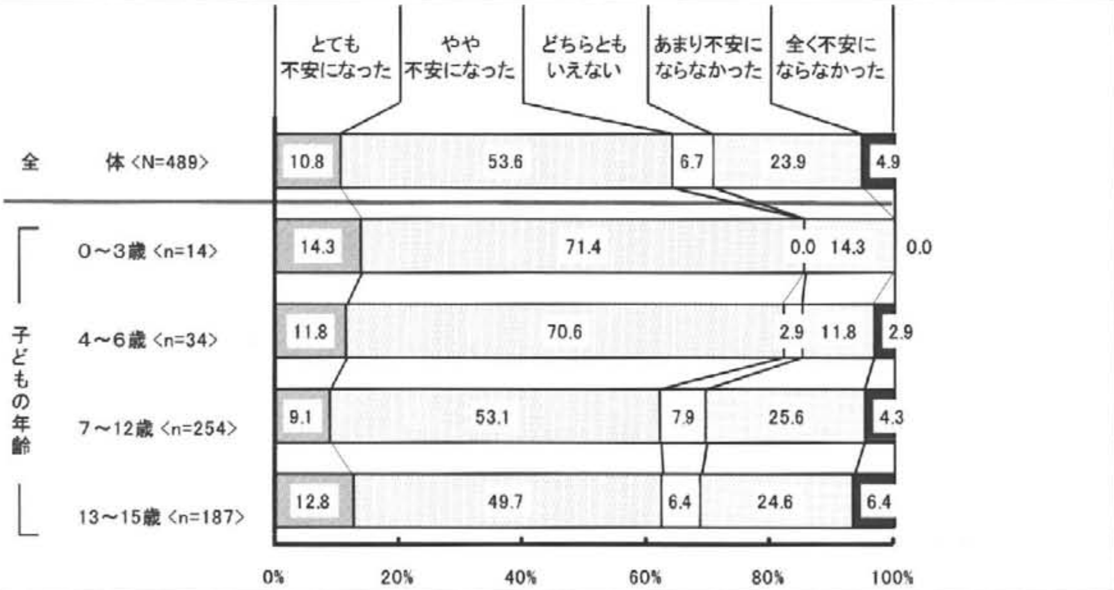
■ 吸入薬については、約3人に2人がきちんと吸えているか不安感を持ちながら治療。
■ インフルエンザ治療薬に求めるのは、「副作用の心配が少ない」「効き目が早い」「効果が早い」など。

吸入薬であるリレンザやイナビルについては、子どもがきちんと吸入できているか「とても不安になった」(10.8%)、「やや不安になった」(53.6%)で、昨年(66.2%)とほぼ同数の約3人に2人(64.4%)が“不安”を感じながら治療している姿がみられます［グラフ18］。子どもの年齢別で、6歳以下と7歳以上とで不安感に約20%の差が生じています。

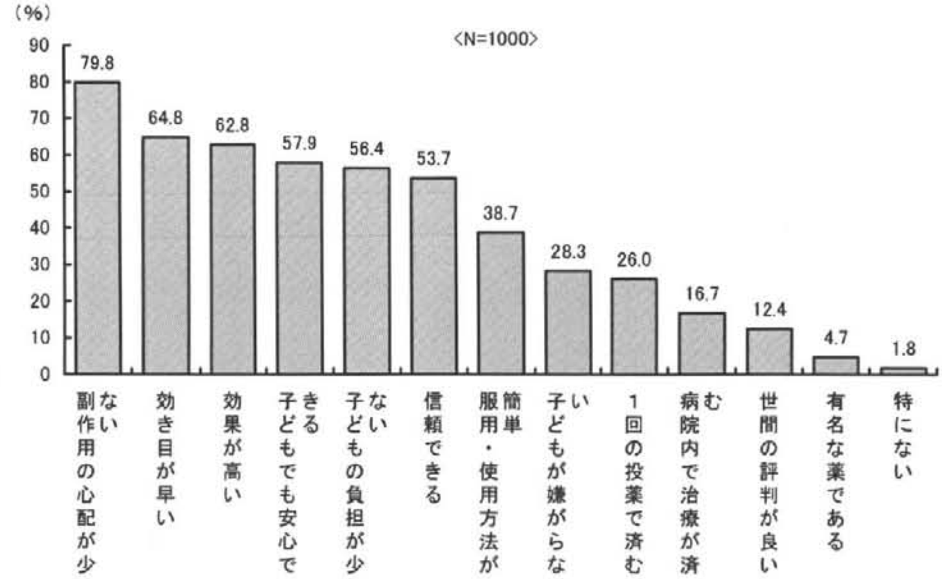
インフルエンザ薬に求めるのは、「副作用の心配が少ない」(79.8%)をはじめ、「効き目が早い」(64.8%)、「効果が高い」(62.8%)、子どもでも安心できる」(57.9%)など［グラフ19］。

母親の年齢別にみると、「副作用の心配が少ない」「効き目が早い」「効果が高い」などは年齢が高いほど、また、「子どもでも安心できる」「子どもが嫌がらない」「病院内で治療が済む」「世間の評判が良い」などは若い母親ほど、それぞれ高い割合となっています。

グラフ18：吸入薬への不安 <n=489>



グラフ19：インフルエンザ治療薬に求めること <n=1,000>（複数回答）



		副作用の心配が少ない	効き目が早い	効果が高い	子どもでも安心できる	子どもの負担が少ない	信頼できる	服用・使用方法が簡単	子どもが嫌がらない	1回の投薬で済む	病院内で治療が済む	世間の評判が良い	有名な薬である	特にない
母親の年齢	34歳以下 <n=172>	70.3	57.6	56.4	62.2	55.8	52.9	39.5	33.7	25.6	22.7	19.8	8.7	7.0
	35～39歳 <n=291>	81.1	67.7	64.6	59.8	56.7	50.9	36.1	33.7	26.8	15.1	11.3	5.8	0.3
	40～44歳 <n=310>	83.2	65.2	63.2	58.7	61.0	56.1	41.3	24.5	28.7	17.4	11.6	3.2	1.0
	45歳以上 <n=227>	80.6	66.1	64.8	51.1	50.2	54.6	37.9	22.5	21.6	13.2	9.3	2.2	0.9

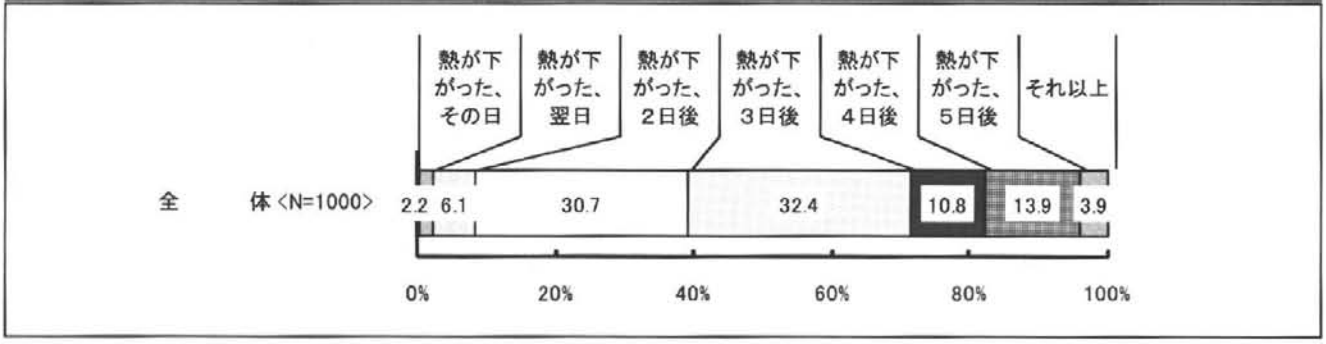
回復までの日数と、医療(医師)に求めるもの

■ 学校や幼稚園に復帰するのは、熱が下がった「3日後」(32.4%)、「2日後」(30.7%)。
■ 医師に求めるのは、「子どもの負担がかからない治療」「重症化の可能性を考えた治療」など。

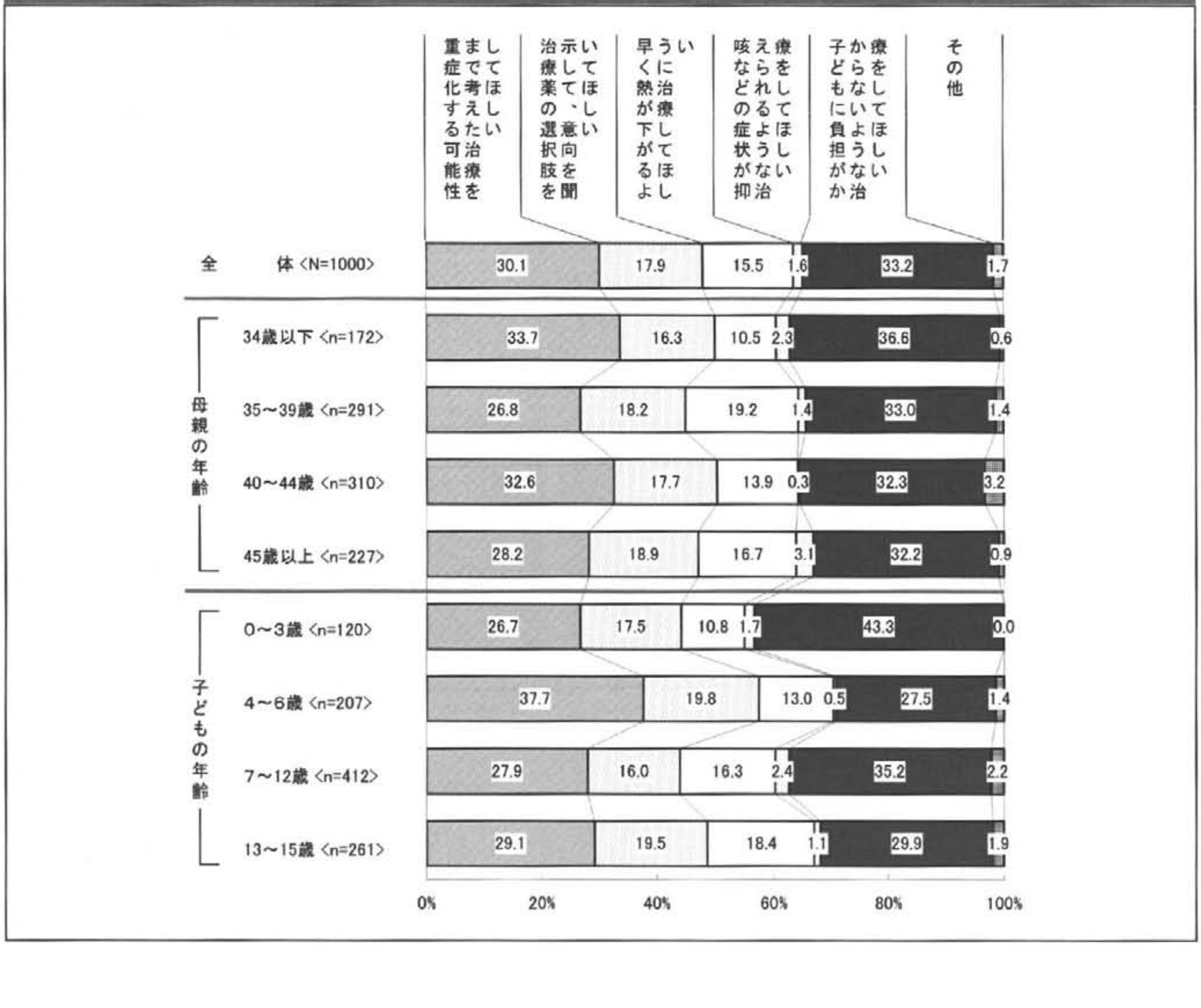
熱が下がってから幼稚園や学校へ通園、通学が可能になるまでは、熱が下がってから「3日後」(32.4%)、「2日後」(30.7%)が多く、"2～3日"が約3人に2人(63.1%)となっています [グラフ20]。

医療(医師)に求めるのは、「なるべく子どもに負担がかからないような治療」(33.2%)、「最初から重症化する可能性を考えた治療」(30.1%)が3割を超えています。
子どもの年齢別にみると、子どもが4～6歳の場合に「重症化する可能性まで考えた治療をしてほしい」(37.7%)が多め、0～3歳の場合に「子どもに負担がかからないような治療をしてほしい」(43.3%)が多めといった差がみられました [グラフ21]。

グラフ20：幼稚園・学校への復帰時間 <n=1,000>



グラフ21：医療(医師)に求めること <n=1,000>



所感　中原英臣（新渡戸文化学園短期大学学長/健康日本21推進フォーラム理事）

インフルエンザにかかったときの対処ー若年層の母親に不安

うがい・手洗い・マスクを今年の冬も子どもに励行させるという母親が多い。防衛意識や重症化や後遺症のリスクなどの危機意識が高まったことは、2009年に猛威をふるった新型インフルエンザの置き土産と言える。

しかし、重症化すれば死亡のリスクを伴うのは季節性インフルエンザも同様であり、3割強の母親が季節性インフルエンザを軽視していることは、いざかかったときの対処に一抹の不安を感じさせる。特に若年層において、発症から48時間以内に治療しなければ薬の効果が得られないことを知らない母親が半数近くいることは問題と言えよう。

処方薬は相変わらずタミフルとリレンザが多く、特に0～3歳児ではタミフルが7割を超えるが、過去の調査同様、今回の調査でも0～3歳児の2割が薬の服用を途中で止めている。抗ウイルス薬はウイルスの増殖を止める薬であり、服用を途中で止めればぶり返す怖れがあるが、そのことを知らない母親が若年層の4人に3人を占めている。

一方、若年層の2割強が「病院内で治療が済む」ことを希望しており、これに該当する点滴薬（ラピアクタ）が上市されている。1回の点滴で速く確実に治してしまうことが子どものためであり、まわりへの感染拡大を防ぐことにもつながる。子どもがインフルエンザにかかったときの対処に自信のない母親にはそう伝えたい。

健康日本21推進フォーラムについて
健康日本21推進フォーラムは、厚生労働省の策定した第3次国民健康づくり運動「健康日本21」（21世紀における国民健康づくり運動）を産業界から支援する目的で1999年に設立され、健康日本21推進全国連絡協議会の一員として活動する任意団体です。

健康日本21推進フォーラム URL：http://www.kenko-nippon21forum.gr.jp